

コーディネーター感想

お茶の水女子大学大学院 博士後期課程
ジェンダー学際研究専攻
鳥山 純子

二つの新たな経験

―災害とジェンダーという研究領域と、研究発表にアドバイスを与える立場から学んだこと―

昨年度、招聘学生受け入れ中に起こった日本での東日本大震災に続き、タイでの洪水。洪水のためタイへの派遣がかなわない本学の学生用プログラムと AIT 学生の招聘プログラムの二つを同時にこなすにはどうすべきかを考えた末に、本年度は災害とジェンダーをテーマに国際ワークショップを開催することとなった。今年は私にとっては本プログラムに関わって 3 年目であったが、これは全く新しい試みであり、過去とはまったく異なる経験となった。

ワークショップを開催するにあたり、数々の経験を積んだ中村雪子さんとプログラムのコーディネーターを共に務めたことは非常に心強く感じたが、私が主に担当することになった、本学の学生の研修については、全くの手探りから始めざるを得なかった。研修計画を考えるにあたってまず念頭においたのは、研究発表を行うにあたって必要な流れを一通り駆け足ながら経験してもらうことと、自分のテーマに引き寄せながら、災害とジェンダーについて考えてもらう、という二点であった。そこで、参加者にはプログラムの最後となるワークショップで、実際に英語で研究発表を行ってもらうこととした。後者の課題については、すばらしい講師を 3 回にわたって迎えることができ、それぞれの講師の立場から第一級の知見、経験、分析を語っていただくことで、災害とジェンダーという分野への関心を刺激してもらい、基礎的な考え方や、このテーマ・トピックを扱ううえで大事にしなければならない思想といった部分で十分なインプットをいただけたと思う。

実は、今回のプログラムに関わるまで、私自身災害とジェンダーといったテーマ・トピックに特に強い関心を抱いたことはなく、学問分野としても、実際の体験としてもこうした問題について積極的に情報を求めて動いたことはなかった。昨年の震災を経験してからは、個人的にそれまで向き合うことのなかった選択に迫られたり(避難の有無など)、それにとまなう政府やマスコミに対する周囲の人たちとの温度差を感じるなどの経験はしていたものの、そうした経験を実際どのように周囲との関係改善や変化に結び付けるべきか、またそこにどういった問題が潜んでいるのか、といったことについては考えずにいたままであった。しかし講演者の話を聞くにつれ、そうした無関心を改めることで今現実に問題を抱えている人たちの力になるという可能性や、そうしたことに今向き合うことが、今後災害を経験したときに同じ問題を生み出さないために重要なのだという理解が実感を伴い生まれてきた。災害とは、今の生活とかけ離れたところにあるのではなく、今の生活をベースに生まれる社会的困難であること、その解決も、今の生活を離れたところにはないということ、そしてだからこそ今考えておかなければならないことなのだ、という切迫した必要性は、一連の講演を聞いたことで初めて自分の中に生まれてきた感覚である。さらに、災害とはハザードという出来事をプロセスする中で生じる社会的困難である、という災害概念は、今後自分の研究の中でも幅広く適応することのできるものであると感じている。

また、もう一つの課題である参加者による研究発表までのプロセスを牽引するという役割をこなす中では、今まで自分が経験してきたとは異なる立場で研究発表準備を経験することができた。参加者の研究関心にそう形でリサーチ・クエスチョンを組み立てるにはどうすればよいか、参加者がもってきた情報を

どう整理すれば研究発表の形になるのかなど、今までとは違った視点で、ある程度の議論をもった発表にこぎつけるまでの過程を考え、アドバイスし、確認するということの繰り返しを行うことが必要とされた。一連の作業を通じて、大学院博士後期課程の学生として普段行ってきた過程を俯瞰的に観察するだけでなく、議論の行き詰まりが往々にして、別の場所から見つけた情報と自分の議論が中途半端な形で接合されていることにある、ということなど新たな発見を得た。これは今後自分がアカデミックな作業をする中でも援用できる知見だと思う。

ワークショップにおいて、本学の学生と AIT の招聘学生とが非常によい議論を展開してくれたことが端的に示す通り、参加学生は非常に意欲的に提示された課題に取り組んでいた。普通の授業とは異なり、プログラムを通じて何を成し遂げられるか、何を学習できるかは参加者次第のプログラムであった。そんな中、参加学生たちは、こちらの意図を十二分に理解し、各自努力を惜しまなかったからこそ今年度のような収穫が得られたのだろう。今後とも、こうした機会が与えられれば、自分ができることを提供していきたいし、またそれを糧に成果を上げてもらえれば大変喜ばしいことだと思う。

.....

お茶の水女子大学大学院 博士後期課程
ジェンダー学際研究専攻
中村 雪子

2011 年度 AIT ワークショップコーディネーターとしての感想 —タイと日本、学生と研究者、実践を結ぶワークショップを作る—

AIT ワークショップ(以下、AIT 交流プログラムとする)に参加するのは、2004 年 3 月のタイで開催された 2 週間にわたる”Women, Globalization and Home-based Work”への参加以来である。今年度は、同じく本学大学院ジェンダー学際研究専攻所属の鳥山純子さんとともにコーディネーターとして運営側に参加することになった。

2011 年 3 月 11 日に起きた東日本大震災と同年 8 月からのタイ・バンコクにおける大洪水を受けて、今回の AIT 交流プログラム、は例年とは異なる内容で開催された。本プログラムに参加する学生は、お茶の水女子大学において『災害とジェンダー』をテーマにした連続講義受講、さらには AIT からの学生とともに現地調査を行い『災害とジェンダー』をテーマにしたワークショップにおいて報告することが課された。コーディネーターとしての役割は、プログラム参加学生のワークショップ報告に向けての準備をサポートする教育的役割と、ワークショップ開催のイベント運営と大別される。互いに補佐的な作業もこなしながら、前年度までの 3 年間 AIT からの学生の受入れを担当していた鳥山さんがそれまでの経験を生かして前者を、私が後者を主に担当した。

この一連のプログラムにコーディネーターとして参加したことで、わたしが得たものは多いが、ここでは 3 点について感想を述べる。

当プログラムの 3 回にわたる特別連続講義は、IGS 教員のネットワークを駆使して充実した講師陣をお願いすることができた。連続講義では、避難者や被災地での現状、ジェンダー視点で災害を思考すること、多かれ少なかれ当事者として現在進行中の被災／復興プロセスに関わっていくためのプラクティカルな方法など、多くの内容を学ぶことができた。なかでも興味深かったのが、世界の多くの地域において女性

を含む脆弱性(vulnerability)の高いグループが異なる災害プロセスを経験するという認識から、そのような差異を前提にした調査が必ず実施されるにも関わらず、日本においては、そのような調査の実施自体がさまざまな理由から困難な状況にあることである。日本では、防潮堤や地震速報などの技術的な部分を重視する傾向が強く、社会の在り方が被害の規模に影響するという認識が薄いことの表れであり、特に災害時に被災者が一枚岩的にとらえられがちであるため差異を前提とした調査の蓄積がなされてこなかったということである。このことから、大震災を経験した今、ジェンダー視点からの災害研究の蓄積が重要であることの認識を新たにした。

参加学生のワークショップ報告準備の指導を担当する際に、鳥山さんとともにコーディネーターとして重視したのは、研究テーマの設定から、文献レビュー、調査対象の選定、分析、英語での報告までを決まった期間で達成するためのスキルアップである。当初、設定した4回以上の指導時間が必要にはなったが、ワークショップでの報告内容からは一定の成果があった。さらに、二人のコーディネーターが博士課程の学生であったことも、今回の特徴であるが、同じ学生でかつ先輩という立場からの指導であったため、気軽で突っ込んだ指導が可能になった側面がある。同時に、通常では交流の機会が少ない開発・ジェンダー論コース(修士)とジェンダー学際研究専攻(博士)の交流の場ともなった。例年実施されてきたAITワークショップは、日本での(学生自身もしくは教員がついた形での)事前準備を経て、タイでの現地調査の結果をパワーポイントを使用して報告するという内容である。今年度実施した博士課程の学生による実践的スキルアップを主内容としたプログラムの成果を来年度以降のAITワークショップにもなんらかの形で生かしていくことは、本ワークショップの一層の充実につながるのではないかと考えている。

本プログラムの最終的な報告の場として設定されたワークショップは、修士課程の学生のための教育プログラムの一環であることから、当初、「災害とジェンダー」というテーマとAIT・お茶の水女子大学双方の学生が報告するという内容しか決まっていなかった。担当教員、IGSスタッフの方々との幾度かの協議をとおして、AIT教員による災害とジェンダーに関する研究報告、AITと本学大学院生によるそれぞれタイ大洪水と東日本大震災を事例とした災害とジェンダーに関連する研究報告、さらに宮城県仙台市で震災直後から女性支援に携わっている実践家の報告というプログラム内容となった。報告内容が多様であることからワークショップの構成に一貫性をもたせることが難しいのではないかという懸念もあったが、大学院生のための教育プログラムが本義であることを重視したワークショップとすることを心掛けた。たとえば、ポスターでは、学生報告がもっとも目をひく配置にし、ワークショップにおいても学生報告へのコメントを主に依頼してコメンテーターをお招きした。結果として、経験豊かなIGSスタッフ、教員のみなさんの手助けを得て、参加者30名強の小規模ながらも密度の濃いワークショップを開催することができた。さらに述べるならば、本ワークショップは今後、数十年にわたって多かれ少なかれ当事者としてかかわっていくことになるであろう私たちにとって「災害とジェンダー」という研究領域のより一層の発展が望まれることが再確認された場ともなった。

当プログラムのコーディネーターを担当したものとして、最後に指摘したいのは、本学が確固としたジェンダー研究のネットワークと蓄積を有し、かつ、10年にわたる本学とAITとの協同プログラムという下地があったからこそ、未曾有の大災害をうけてなおかつ今年度の変則的ではあったが充実したAIT交流プログラムが実現できたことである。今後もこのつながりが継続的に発展していくことを願う。